

課題

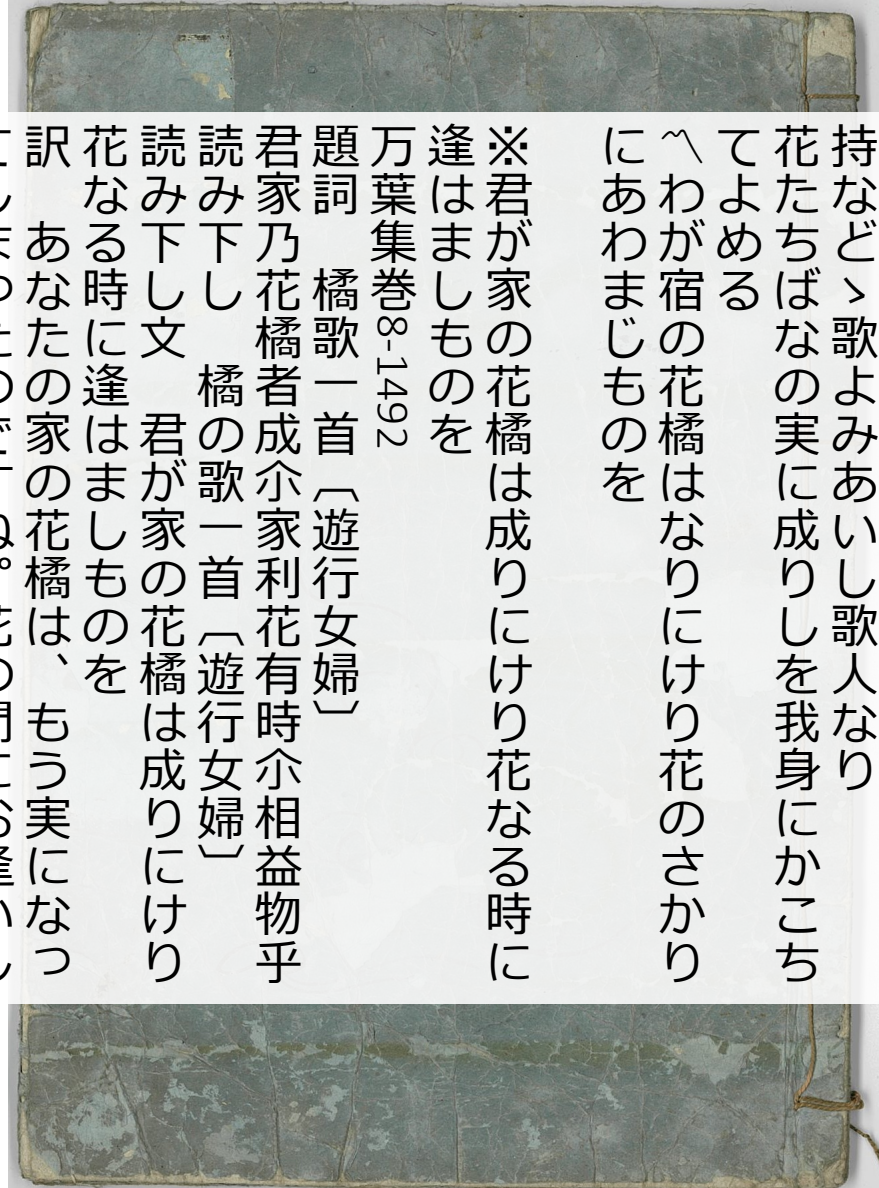


いにしへの游君乙女と云へるは中納言家
持など、歌よみあいし歌人なり
花たちばなの実に成りしを我身にかこち
てよめる
へわが宿の花橘はなりにけり花のさかり
にあわまじものを

※君が家の花橘は成りにけり花なる時に
逢はましものを
万葉集卷8-1492

題詞 橘歌一首〔遊行女婦〕
君家乃花橘者成尔家利花有時尔相益物乎
読み下し 橘の歌一首〔遊行女婦〕
読み下し文 君が家の花橘は成りにけり
花なる時に逢はましものを

訳 あなたの家の花橘は、もう実になつ
てしまったのですね。花の間にお逢いし
たかったのに。





大和物語に亭子みんへうかかれ女どもを召されし中に大江玉澁が娘に鳥飼の立野といへる有り鳥かひといふ事をかくし題にして歌よめと有ければ浅みどりかみある春にあひぬればかすみならねど立のぼりけり

※大和物語

「物名(ものな)」といって、「鳥飼(とりかひ)」という、「お題」を詠み込むことが主眼の和歌だから、和歌の意味自体は、こじつけみtainなものなのです。

「あさ緑色の草木の新芽が、見甲斐のある春に出会った、その新緑ではないが、私もまた生きてきた甲斐ある良い御代に会ったので、春に立ち上る霞ではないが、私もこうして帝の御前に立ち上ったなあ。」

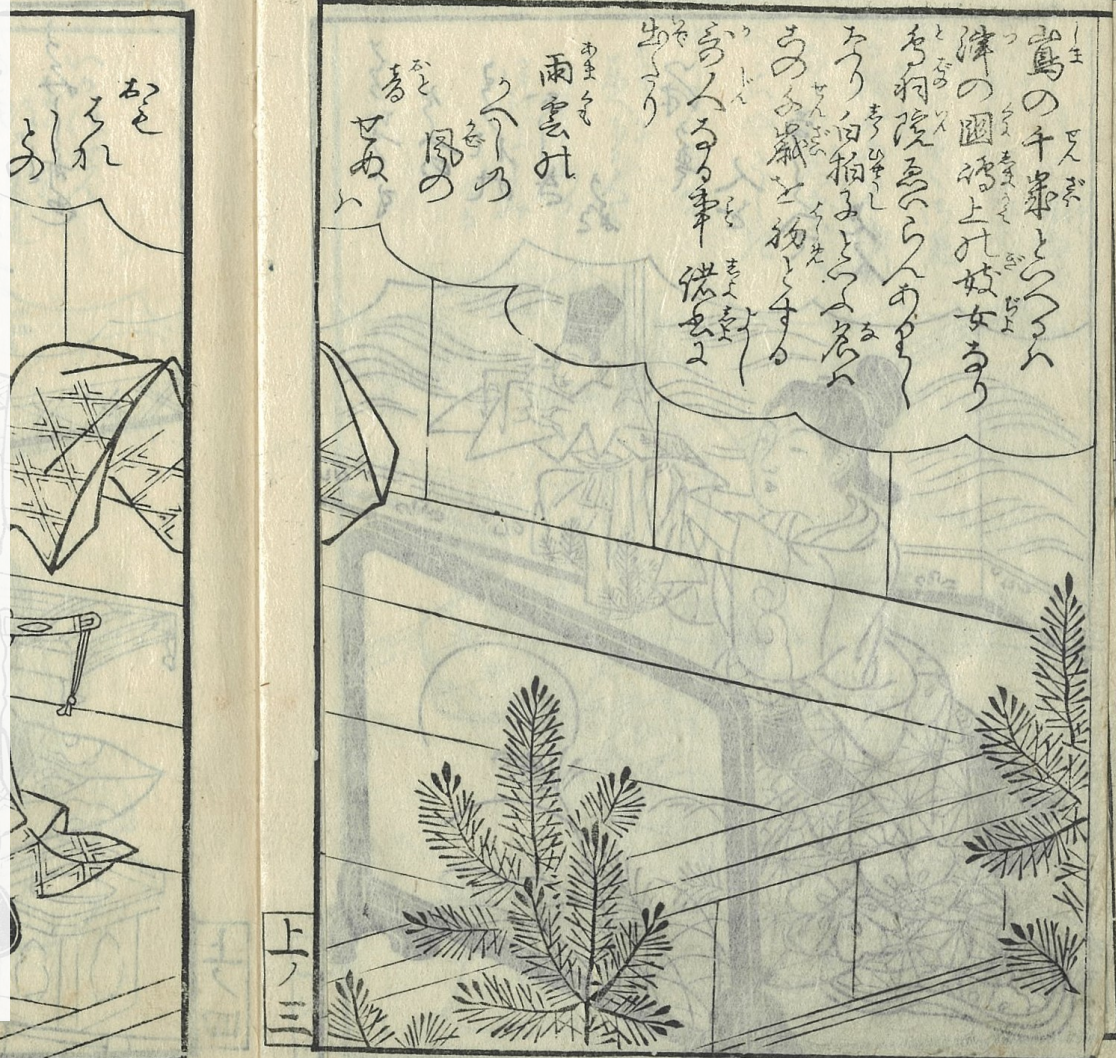
季節感と今の治世のことほぎめでたく平和でいい時代だ、立派な帝が治めていらっしやるからだ)と自分が帝のお召しにあずかった光栄な気持ちとを、技巧的に詠み上げた。

ん
 ※詞花集・十訓抄卷下
 むかし鏡の宿などに人形をつかひ
 て旅人をなぐさめける遊女のあり
 それがなかに名曳といへるはやさ
 しき歌よみなり
 東へ下る人にわかるゝあかつきに
 よみける
 へはかなくもけふのわかれのおし
 きかないつかは人をながらへて見



上ノ二

寫の千歳といへるは津の国嶋上の
 妓女なり鳥羽院ゑいらんありしな
 り白拍子といふ名はこの千歳を初
 とするよし歌人なる事諸書に出た
 り
 へ雨雲のかへしの風の音せぬはお
 もはれしとのこゝろなるべし
 ※長唄 「平家物語」



上ノ三



上ノ四



平宗盛の妾久万野母の病によりていと
ま申かくるといへどもかなわず宗盛同
車にて花見に出給ふ時はなのちるを見
て母のいたわりをあづまの花とよそへ
てよみし歌也

いかにせん都の春もおしけれどなれ
しあづまの花やちるらん

※謡曲『熊野』（ゆや）喜多流では

『湯谷』。『平家物語』の巻十「海道
下」（かいどうくだり）の場面から発
展させた。

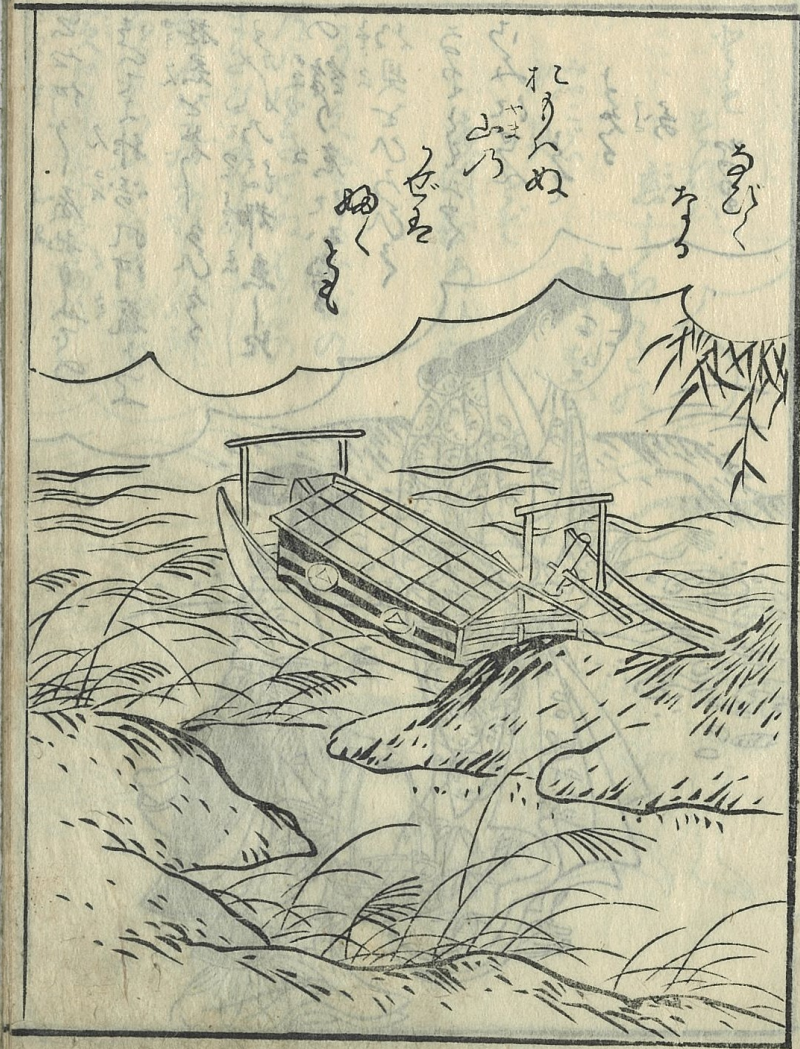


上
 五

為兼の卿佐渡の国へまかりし時越後
の国寺泊りといふ処にて遊女初君に
契りける初君わかれによみし歌也
へもの思ひこし路の浦のしら波もた
ちかへるならひありとこそきけ
※玉葉和歌集



上ノ五



備後尾の道の遊女宮つこ、廣瀬何がし
と深くちぎりけるが、ある時すゝきの
風になびきたるを見てよめる
へ花すゝききみがかたにぞなびくなる
おもはぬ山のかぜはふくとも
※大和物語下二段



上ノ六





公卿何がし殿、物もふでのついでに神
 崎の河菰といふ游君をめし給ひける、
 わかれの後、都恋しきの余り、名にお
 へる都貝をひろひてなりともなぐさみ
 にせんとて、よめる歌なり
 へともすれば恋しきかたの名におへる
 都貝をぞまづひろひぬる
 いにしえ今に和歌の道はつきせぬはま
 のまさごなりけらし歌人は居ながら名
 所しるといふは歌の徳を賞せしたとへ
 なり

※絵本貝歌仙／西川祐信画・京都菱屋
 治兵衛版 江戸鱗形屋孫兵衛
 延享五年（1748年）に歌あり

※以下、歌ではなく教訓物の類になつてゐる。
壁に耳、石の物いふ世の中といふは人の口に戸が立られぬといふ事、人ごといはゞ目代置けもいづれいわぬはいふに弥増る也、問に落ずに語に落るたぐひ、七人の子はなすともおんなにはだはゆるすな、をんなさかしくて牛売られぬなどとをんなのくちがるなるをいましめのたとへ也、くちはわざわひの門と心得つゝしむべし

たて臼にこもまいた様なが、よこ
槌の柄のぬけた様なすがたでも顔
はなま壁にそろばん打付た様なと
いわれても、鬼の女房に鬼神とい
はれぬ様にあさにつるゝよもぎの
如く、人は善悪の友によれば朱に
まじると赤ふなる道理見るが見ま
ねと心やさしくなればすぐちが急
くぼに見えめでたき殿をもち給ふ
べし



花は芳野人は武士といふ筈、武士はくわねど高やうじ、たかはうえても穂はつまぬといふ、鷹も鳥の内でもものゝふにたとへたり、其内にも石に毛のはへた様な男もあり、浮世壱ト五リン、こんど百より今五十うまひものは宵にくえじや、人のうはさも七十五日と高をくゝりごちきすれば、友がほしいと進るくどく、共に成仏女房迄がわれなべにとぢぶた類をもつて集ると一疋の馬がくるへば千疋の馬がくるふなり人のふり見てわがふりなをしつゝしむべし

せんだんは二葉よりかうばしいとい
 へど、氏より育ちといふ事あればそ
 だちがらにて鳶が鷹うんだ様に、親
 にも及ざる事あり、また瓜のつるに
 なすびはならぬ土がうましたつくね
 いもとさげしまるゝも親の心子しら
 ず、親が何いふて聞しても馬の耳に
 風、かゝるのつらに水、ぬかに釘と
 聞ぬから、親に似ぬ子は鬼子と云れ、
 子が無て泣物は無といゝつゝかたわ
 な子がかわいひならひ、やけのゝ
 きゝす夜のつる、誠や西明寺殿歌に
 へ子をおもふ親ほど親を思ひなば世
 に有がたき人といわれん



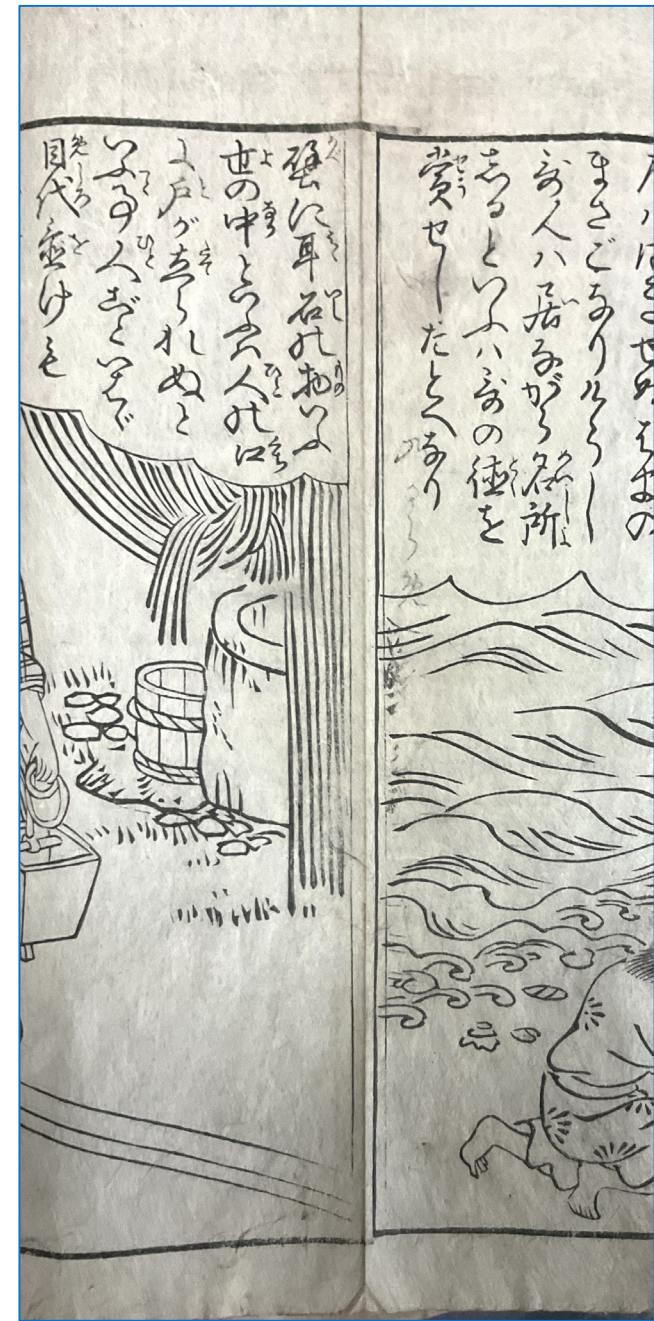
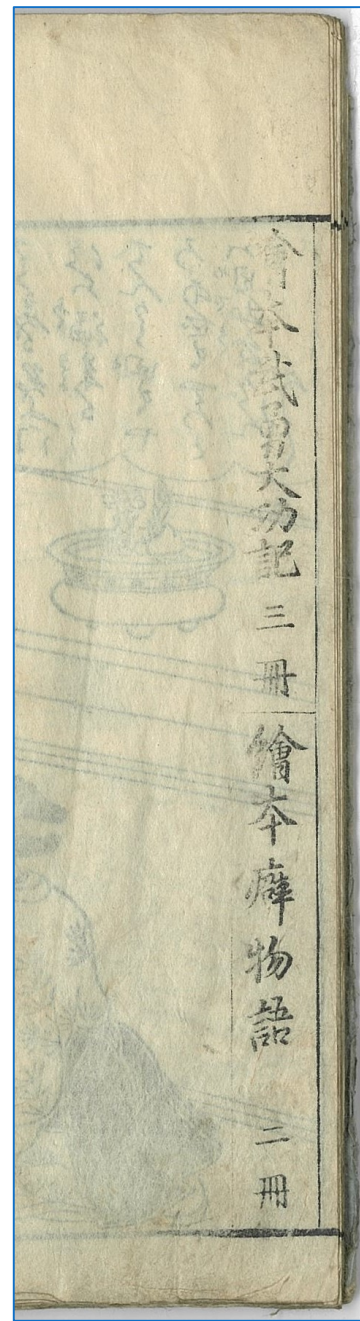
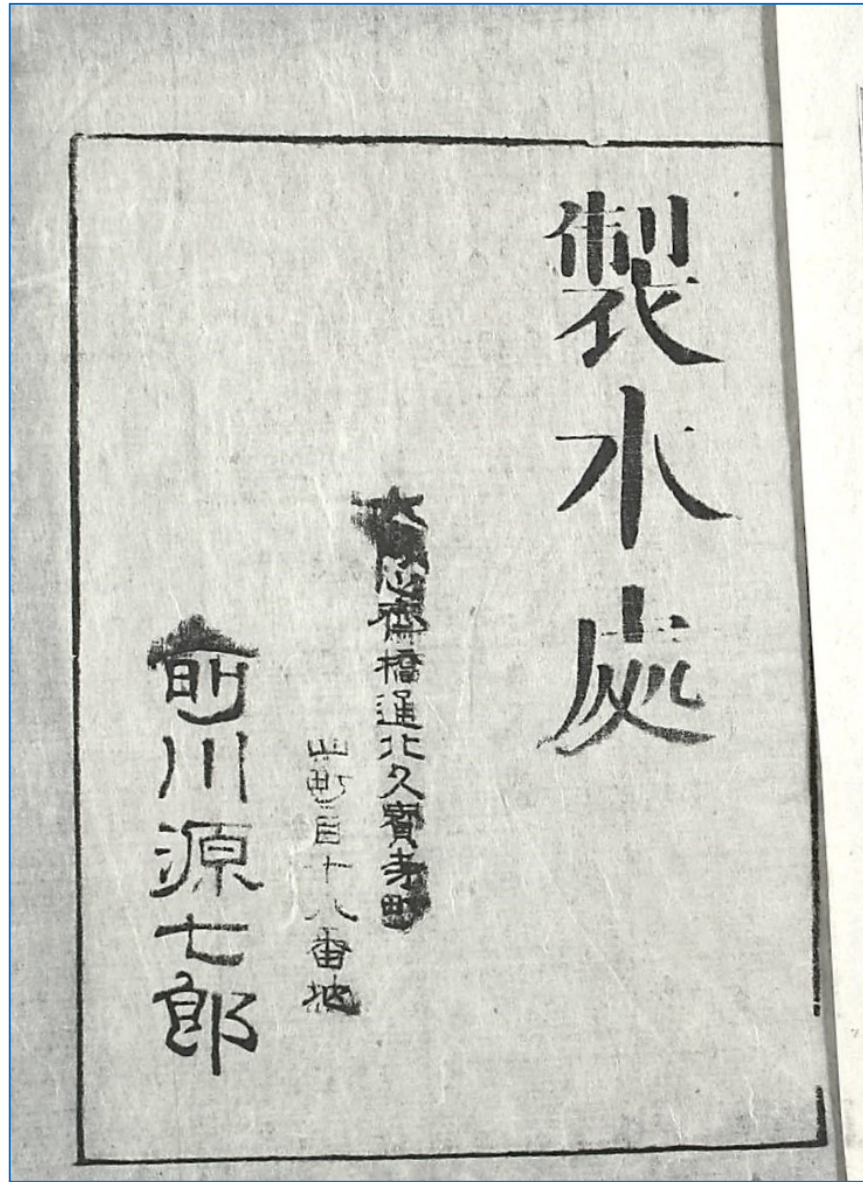
弘法もふでのあやまり猿も木から
落るは皆すいが身を喰ふ道理、紙
子着て川へはまるもかわだち川で
はてるも陰陽師身のうえしらず也
とかくきんげんみゝにつかわぬ様
にいさゝかの善事も百日に百は
いちりつもりて山となればつとめ
て寸善尺魔をはらひ給ふべし

色は分別の外とて由段は大敵心の駒に手綱ゆるすべからずさが岩木にあらざる身は用心になわをはりさわらぬ神にたゝりもなければ、こけぬ先のつえをわすれず深ふとつてあさう渡ればふみかぶりはあるまじき也



果報は寝てまてとは、せいては事をし
そんずるのいましめ、のらの節季ばた
らきをせぬ様におそうじも淀までとい
ふ事あれば、つねにぬれ手では、あ
いた口へもちといふ、うまいことはと
うるふが斧、からすが鶉のまねと心得、
油断なくつとめよ、となりかせぐにお
ひつくびんぼう、なければ後にはかね
がかねもふけ、まいた種は敷居の下か
ら戻る、笑ふ門には福来る、てんから
田もやるあぜもやるとは目出度ぞんじ
まゐらせ候





- 国歌大観（データベース）を見る
- 和歌をひらがな表記にしWEBに入れてみる
- 典拠検索名歌辞典等を活用する

